〔竹取物語〕かくや姫いはく、よくもあらぬ形ちをふかき心もしらで、あだ心つきなば、後くやしき事も有べきをと、思ふばかり也、○下略

〔伊勢物語上〕むかし男、女いとかしこく思ひかはして、こと心なかりけり、○下略

〔日本書紀九神功〕五十一年、卽年以千熊長彦副久氐等遣百濟國、○中略百濟王父子、並頴致地啓曰、○中略今臣在下、固如山岳、永爲西蕃、終無貳心、

〔日本書紀十應神〕九年四月、遣武內宿禰於筑紫、○中略於是天皇則遣使以令殺武內宿禰、時武內宿禰歎之曰、吾無貳心、以忠事君、今何禍矣、無罪而死耶、

〔めのとのさうし〕男ならず、をんななりとも、おしうのためには、いのちをもすてんと、おぼしめされ候へ、おつとにも、おしうにも、二心だになければ、みやうがありて、ひとさらに、をろかにおもはず、○下略

〔金槐和歌集述懷〕太上天皇御書下預時歌

山はさけ海はあせなん世成とも君にふた心我あらめやも

〔類聚名物考心情一〕ひとへごゝろ　單心

貳心にむかへて、たゞひとすぢの心をいふ、

〔源氏物語一桐壺〕心のうちには、たゞふぢつぼの御ありさまを、たぐひなしとおもひ聞えて、○中略おさなきほどの御ひとへごゝろにかゝりて、いとくるしきまでぞおはしける、

〔新撰六帖一〕ころもがへ　光俊

たをやめのけふぬぎかふる衣手のひとへごゝろは我身なりけり

〔蜻蛉日記上〕二日ばかりありてきたり、ひと日の風はいかにとも、れいの人はとひてましといへば、げにとや、おもひけんことなし、○中略まけじ心にて又、